九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王朝物語史序説

坂本，信道

https://hdl.handle.net/2324/4495981

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名　：　坂本　信道

論 文 名　：　王朝物語史序説

区　　分　：　乙

論　文　内　容　の　要　旨

第一章　さすらう官人たちの系譜

『土佐日記』の「楫取」に注目すると、『伊勢物語』主人公の東国下りの「渡し守」、『楚辞』の屈原が流謫の途次で出会った「漁父」が、失脚した官僚の境涯を浮かび上がらせる鄙の傍観者として共通する性格を持ち、三作品は同一の作品構造だとわかる。土佐流浪の官人の作『土佐日記』は、文人官僚の文学であり、韜晦・戯作的な性格を持つ。意味不明とされてきた性的描写の場面も、男性官人の文学の流れの中に置くことで、『本朝文粋』などに載る漢詩文の性的戯作の仮名版だとわかる。女性に仮託する方法自体が、文人官僚の漢詩文における戯作の世界を仮名文学に移しての試みとして構想されたのである。

第二章　『和泉式部日記』成立の背景

敦道親王との恋愛の記念碑的作品という面ばかりが強調されるが、敦道親王側からの援助や資料提供の痕跡も窺われ、成立の背景に親王の私家集を編纂するような意図があったと考えられる。従来の日記文学の自照性を離れ、虚構として構想された「物語」と読み解く。他資料の親王像と異なる理想的な描かれ方も、物語の主人公であれば当然である。

第三章　『住吉物語』の祖型

現在本『住吉物語』は改作本である。ほぼ半分を長谷寺の霊験譚が占めている異常な物語の構成を分析し、原作にはこれほど長大な霊験譚はなかったと考えた。失踪した姫君に男主人公が巡り会う最大のテーマが、発見後も住吉に姫君を置いたまま都から通い続ける設定は、恋の結末としては祈願成就とは言い難く、霊験譚の効験として不審。男君が遠路を超人的に通い続ける展開は、『源氏物語』などの恋愛・婚姻形態とは異なる、『伊勢物語』や『大和物語』と共通する古態である。

第四章　「楼の上」巻名試論――『うつほ物語』の音楽――

巻名として「楼の上」の語が選ばれたのは、「楼」が古代の人々には神聖な不可思議な空間として意識されていたからで、音楽伝授が完成する物語の巻名として必然であった。物語の舞台となる場所というだけで安易に名付けられたものではないことは、説話や経典との比較検討で明らかである。

第五章　そりはしのかなた

稀な語「そりはし」が音楽伝授の場面に偏在する理由は、「そりはし」が聖なる属性を持ち、極楽や蓬莱とこの世を繋ぐものとしての象徴性があるからである。音楽伝承譚の構想の中で、作者は「そりはし」を伝授の行われる聖なる楼と日常空間を隔て、かつ繋ぐものとして用い、「変化（へんげ）」と呼ばれ、秘曲を伝える俊蔭一族が通る道として設定している。

第六章　女一の宮の降嫁――『うつほ物語』求婚譚の栄華の方法と論理――

主人公仲忠があて宮ではなく、帝の娘女一の宮と結婚するのは敗北ではない。帝の娘を得ることに、より重要な意義と価値があるためである。あて宮は東宮入内前も入内後も、他の求婚者たちと仲忠では応対に明らかな差があり、主人公に傷がつかないよう書かれている。国譲の新東宮決定により仲忠の置かれる劣勢な政治状況まで視野に入れ、求婚譚の結果について非常に長い構想で書き継いでいる。

第七章　『夜の寝覚』の予言と構想――天人予言の達成――

予言は音楽伝承譚の話型を踏まえており、『源氏物語』宇治十帖の影響を強く受けた暗鬱な世界を描きながら、散逸した結末部分を含め、物語の典型である大団円へ向かっている。国王まで秘曲を伝えるという予言は、秘曲伝承者である石山の姫君が東宮に入内し、やがて中宮となることで実現したと考えて良い。予言は構想として結末まで生きている。

第八章　音楽伝承譚の系譜――『源氏物語』明石一族から『夜の寝覚』へ――

帝から伝わる秘曲を伝えることで一族の皇統回帰を遂げる『源氏物語』明石一族の物語と、天人の秘曲伝授による『夜の寝覚』一族の繁栄の話型は同一であり、物語全篇の構想において明石一族の物語が用いられている。両者は表層のみならず、物語の構造において、深い影響関係にある。

第九章　衰微する帝威――『夜の寝覚』の権力構造と結末――

恋の心情描写に特化しすぎ、物語における秩序の体現者である「帝」も、臣下と同列の恋する男となった結果、作品を展開させる基盤の秩序が失われ、物語は結末へ向かう内部の推進力を失っている。『夜の寝覚』では奇跡が帝の関知しないところで生起することも、王権の統治力の喪失を意味する。構想の骨格はすでに崩壊しており、こうした作品の登場が王朝物語の終焉が近いことを象徴する。

第十章　えせ兄妹攷――浜松中納言と吉野の姫君の恋物語と構想――

兄妹の恋という常套の禁忌を設定しているようでありながら、実際には二人には血縁関係がなく、主人公に課されるはずの禁忌もそこには存在しない。先行する物語の禁忌の兄妹の恋を形の上では模倣しつつも、物語の展開に必要な禁忌の克服はそこにない。王朝物語衰退のきざしである。舞台が吉野であるのは「もろこしの吉野」という歌語に拠るとされてきたが、それとは別に歌枕吉野と妹背山・妹背川の密接なかかわり、妹背が平安時代では兄妹を指すという理由から、兄妹の恋物語に相応な吉野が選ばれたのである。